

第9章 哲学における欧米語（英語）支配

中 島 義 道

1. 哲学における「ヨーロッパ中心主義」

おかしなことに、わが国の哲学者は（文学のように）英米哲学・ドイツ哲学・フランス哲学というような言葉の領域によって区分されている。「何をなさっていますか？」と聞かれて「ドイツ観念論です」とか「現代ドイツ哲学です」という具合に。

この場合、だれでも自分はドイツ哲学を「通じて」哲学をしていると信じているが、おうおうにしてドイツ哲学＝哲学という等式に支配されてしまう。なぜなら、われわれ日本人がカントやハイデガーを理解するだけのドイツ語を習得するだけでも、膨大な時間と労力がかかるからである。言葉だけをたよりに精緻な議論をすることが要求される哲学では、現実問題として一つの言葉（ドイツ語）だけしか哲学的議論レベルに達しえないからである。いや、事態はもっと悲劇的である。多くの同僚は卒論でカントを手がけるとカントの専門家に、ヘーゲルを手がけるとヘーゲルの専門家へと分類される。しかも、ドイツ語は読めるものの書けも話せもしない者が多い。ドイツ哲学の専門家でありながら、ドイツ語で哲学議論できない者が少なくない。

つまり、哲学とはほんらい普遍的な知をめざすものであるはずなのだが、きわめておかしなことに、文学研究（ゲーテ研究やカフカ研究等々）のようなカント研究やニーチェ研究が蔓延しているありさまである。こうした空気を吸っているうちに、健全な哲学の精神は完全に麻痺してしまう。ヨーロッパ半島という小さな地球の一部分に発祥した特殊思想を人類普遍の哲学だとかん違いしてしまうのである。学生時代「社会思想史」という講義を受けた。そこで、私は「中世において人々は教会の権威のもとに…ところが、ルネッサンスによって人々は人間を再発見し…また宗教改革は神の前に自由な個人を自覚し…」という講義を聴きながら、なんの疑問も覚えなかった。当時の私は、こうしたすべてがヨーロッパという小半島の出来事であることに気がつかなかった。なぜか人類普遍の出来事であるかのように思っていたのである。であるから、「中世において教会の権威のもとに安定した世界像が開かれ…」などと答案に書いたし「これは日本の話ではないのに？」という疑問を抱かなかつたのだ。

では、こうした「ヨーロッパ中心主義」から脱しようとするとき、われわれにはどんな道が残されているのか？ じつは、ここでわれわれは大きな困難に遭遇するのだ。事態は哲学の場合にはなほだやかいかである。哲学のもつ普遍的理念を掲げて「ヨーロッパ中心主義」を糾弾す

ることまではできる。だが、それにかわる「代案」を出すことは至難の業だからである。われわれは日本人なのだから、古代ギリシャ以来の西洋哲学に代わって日本思想や仏教思想を学ぶべきだという結論には至らない。こうした偏狭な態度は哲学と思想とを同一視しており、やはり普遍を求める哲学を殺すものである。では、西洋も東アジアもインドもイスラムもアフリカも取り込んだ哲学を構築すべきか。しかし、これは途方もない労力を要求しながら、万一成功したとしても「比較思想」という哲学のもつ普遍的理念にまっこうから対立する非哲学的学問に変身する。「ヨーロッパ中心主義」を批判することまではできる。だが、どこにも安易な答えなどところがないのである。

しかも、最近ではもっと事情は込み入っている。「ヨーロッパ中心主義」をヨーロッパの哲学者たちが自覚しはじめ、みずからの過去を反省しながら新しい試みを出しているからである。ヨーロッパ哲学はその誕生以来絶対的真理を求める態度や同一性・統一性を最高の価値とする態度から身を放すことはなかった。とくに近代に至って、こうした理念はますます疑いえない公理となった。こうした特殊ヨーロッパ的態度（「ログス中心主義」とも言われる）は絶対ではなく、特殊ヨーロッパ近代的態度なのかもしれない。19世紀末からこうした反省がなされており、それが現代ではとりわけ大きな問題となっている。

ここまではよい。ヨーロッパ人もまんざら馬鹿ではないことがわかった。だが、これからがいけない。この風潮にわが国の西洋哲学者たちも、なんの疑問もなく便乗しているのだから。例えば、こんなことである。これまで、ログスなど信頼したこともないはずなのに、「ログス中心主義」を反省したり、神など生きていたためしはないのに「神の死以降の精神状況」を論じたり、——少々専門的になるが——超越論的主観などという強烈な主観など片鱗もないはずなのに、「超越論的主観主義」を糾弾したり…たいへんおかしな具合に、「ヨーロッパ近代とは何であったのか?」という問いを掲げて、こともあろうに「自己反省」しているのである。

われわれは、古代ギリシャ哲学以来のヨーロッパ人の自己反省に付き合う必要はない。むしろ、固有の自己反省をすべきである。それは、ヨーロッパ哲学を導入してからここ120年間のわが国の哲学のあり方の自己反省をすることであろう。

2. 哲学翻訳書が難解である理由

哲学をやっていると門外漢から必ず聞かれることがある。それは「日本語の翻訳が難解で困ります。原文のほうがやさしいのでしょうか?」というヤツ。これは、かならずカントやヘーゲルを原書で読んだことがない者の問いである。こうした素朴な問いは半分当たっており、半分外れている。そこで、固有の自己反省の糸口として、なぜわが国の哲学翻訳書が難しいのか、あまり世間では知られていないようなので、語ってみよう。

カント以前の哲学書は決して難しくなかったのである。カントから難しくなった。なぜか? カントはわれわれにとって難しいのみならずほとんどのドイツ人にとっても難しい。よって、それは普遍的に難しい。昔のラテン語のように、カントはほとんどの人に歩み寄れないゆえに、普遍性を維持しているのだ。カントは言っている。

「なお、私がこの章においてもまた本書『純粋理性批判』全体においても、しばしばラテン語をはさんで、これと同義のドイツ語を使用しなかったために、良い文体の趣味に反したことについて、お許しを願いたい。私は、〔ドイツ語を使って〕学問的用法を難しくし、わずかでも理解できなくするよりは、むしろ〔ラテン語を使って〕文章の優美さをいくぶん犠牲にするほうがましだと思ったからである」

じつのところ、カントの細工はずいぶん込み入っている。彼は手垢にまみれた日常言語をそのまま使うことをはばかる。それらに自分の思考を乗せるだけの能力がないと確信していたからである。しかも、カントはドイツ語で哲学書を書こうとする最初の哲学者の一人に属する。とすると、どのような道が残されているのか？ カントは半人工言語を創造するほかないと確信したのである。具体的には、ギリシャ語やラテン語を混ぜ合わせたり、それらを日常ドイツ語と組み合わせたりした。こうすることによって、細分化は飛躍的に増し、一つの言語の意味範囲が細かく限定され明確な意味を担うことができる。

例えば“Apperzeption” “Apprehension” “Synthesis” “Antizipation” “transzendental”などのギリシャ・ラテン語起源の言葉を大々的に使う。次に、これらを適当に組み合わせ、あるいは適当にドイツ語を交えて一層厳密な哲学言語にする。例えば“transzendente Apperzeption”〈超越論的統覚〉“Synthesis der Apprehension”〈覚知の総合〉“Antizipationen der Wahrnehmung”〈知覚の予料〉等々。

これは、ある程度成功していると言えよう。そして、明治のわが国の哲学者たちは、こうした用語を——仏教用語を適当に斟酌しながら——やはり半人工語に翻訳したのである。その意図は正しかった。だが、そこに超難解な姿をした言葉が誕生した。カントの原文では、ラテン語やギリシャ語を知っておれば、大体予想のつく言葉がまったくわけのわからない言葉に変身した。たぶん、このあたりに「翻訳語」の最大の難解さが潜むのである。

彼らはドイツ語起源の“Wahrnehmung”を「知覚」に、ラテン語起源の“Apprehension”を「覚知」と訳した。あるいは“Sinn”を「感官」、 “Sinnlichkeit”を「感性」、 “Empfindung”を「感覚」、 “Gefühl”を「感情」とたいへん似通った字面に訳した。そのため、相互の区別を理解するのが難しく、さらにこれらを組み合わせると“Sinnenempfindung”という原語は「感官的感覚」という奇怪な姿になる。であるから、字面は平易でもそれを翻訳だけから了解することはほとんど不可能である。

『プロレゴメナ』から一例を挙げよう。

「経験的判断は、客観的妥当性をもつ限りにおいて経験判断である」

ここでも、カントの手法は同じである。ラテン語起源の“empirisch”とドイツ語起源の“Erfahrung”とを意図的に分けて使っているのだ。“empirisches Urteil”のうち客観的妥当性をもつものを“Erfahrungsurteil”と呼ぶことにしたのである。だが、これを翻訳で読むと前者は「経験的判断」後者は「経験判断」となって、両者の字面ははなはだしく似ており困難度は数段増す。

次にもっとひどい例を挙げてみる。『判断力批判』より。

「感官にとって感覚的に快いものが、すなわち快適である。…およそ適意は本来（快の）

感覚である（と言われ、またそのように考えられている）。したがってまたわれわれに
快い一切のものは、それが快いからこそ快適なのである…」（『岩波文庫』篠田英雄訳）

これだけを読んで（とくに最後の一行）何が言いたいかわかる人がいるだろうか？ ここには「快適」と訳された“angenehm”と「適意」と訳された“was, gefällt”との区別が鍵である。一行目を読むと漠然と、「快いもの」のうちで「感覚的に快い」ものが「快適」らしいことがわかる。次の文章に至ると、今度は「適意は感覚である」と言っているのだから「適意」＝「快適」という等式が成立するように思われる。そして、次の文章に至ると、今度は「快い一切のものは、快いから快適である」と言っており、読者は途方に暮れるのである！ このわかりにくさの半分はカントの責任である。彼は“was, gefällt”のうちで感覚的なものを“angenehm”と言いたいだけなのだ。だが、残りの半分の責任は訳者が受けもたねばならない。なぜなら、訳者はここで一方で「適意」というこねない日本語を使いながら、他方「快いもの」という日本語も使っている。これらはドイツ語では同じ言葉（“was, gefällt”）なのである。であるから、用語を統一すれば「感官にとって感覚的に快いものが、快適である。…およそ快いものは本来（快の）感覚である（と言われ、またそのように考えられている）。したがってまたわれわれに快い一切のものは、それが快いからこそ快適なのである…」となる。こうしてもまだ、チンプンカンプンであるが、少なくとも訳者は原文の困難をさらに困難にしている、いや解説を不可能にしていると言えよう。

3. 哲学における最近の「英語支配」

きりがいいからこの辺りでやめよう。つまり、カントは意図的に民衆の言語から遊離したところに哲学言語を構築した。それは、彼が哲学に明晰さや厳密さを求めたからであり、日常的ドイツ語だけではそれが充分達成されないと自覚したからである。私はこうしたカントの意図自体は否定すべきものではないと考える。ただ、こうした状況を知って我々は翻訳をすべきなのだが、その努力が充分でないことは確かであろう。

わが国の哲学者の怠慢を認めよう。だが、同時に私が矛先を向きたいのは、哲学は「易しい」と思い込んでいる人々である。彼らは量子力学や相対性理論が易しく表現していないのはケシカランと言わないのに、哲学は易しく表現しなければならないと主張する。もちろん、哲学を易しく書くことはできる。だが、それは——ちょうど素人向けの何の記号も数式もない相対性理論入門とか量子力学はわかるという安直な本と同様——厳密さと明晰さを犠牲にしたまがいものなのだ。

哲学が哲学であるからには難解化はいつでもつきまとう。フッサールやハイデガーもけっして「易しい」とは言えない。まして、ドルーズ、デリダ、ラカンなどフランス現代哲学者の言語は超難解である。だが、英米哲学者の言語は平易になりつつある。イギリスにはもともとそういう伝統があったが、極端な平易化はヴィトゲンシュタインの後期思想によるところが多い。彼は、日常言語を細かく分析することこそ哲学の命であることを提唱した。そして、ここにきわめて現代的な（最もやっかいな）哲学における「英語支配」が成立することになった。

彼らの言う日常言語とは何か。それは「英語」である。ここから、ごく自然に——傲慢かつ浅薄にも——英語を分析することが哲学することであるという信念が生まれた。“It rains”の“it”とは何だろう、と議論しているうちはいいのである。哲学者も自分が固有の言語（英語）に拘束されていることを自覚している。“First Person Problem”というものがある。「一人称問題」としか翻訳のしようがない。しかし、“person”とは伝統的に“man”とは異なる道德的主体という意味が含まれている。であるから、場合によってこれは「人格」と訳され“personal identity”は「人格の同一性」と訳される。われわれ日本人にとっては「人称」と「人格」とはまるで違う響きをもっている。だが、英米人はそこに両者をなめらかにつなぐ意味を獲得している。つまり、“First Person Problem”とは「一人称」であるとともに「道德的存在者」のあり方に関する問題なのである。とはいえ、日本語に人称概念が皆無（きわめて希薄）であるがゆえに、このあたりまではわが国の哲学者は錯覚に陥ることはない。

だが、英語における議論が日本語にもおおよそ妥当しそうな気がしてくるところに至ると、われわれは普遍的な議論をしているような錯覚を抱いてしまうのだ。例えば、J・L・オースチンに“illocutionary act”と“perlocutionary act”との区別がある。前者は「発話内行為」（il—はin—の変じたもの）後者は「発話媒介行為」と訳されている。例えば「なんで遅刻したのだ？」という発話は、理由を質す側面は「発話内行為」であるが、それを「通して（per）」威嚇したり、脅したり、恥いらせたりする側面は「発話媒介行為」である。こうした区別はいかにも有効であるかのように見える。しかし、そうであろうか？ 英語の場合なら、“Why…?”は明確に疑問文であるから、その発話の「内に（in）」理由を質す行為を位置づけるのもわかる。それ以外は発話を「通した」行為であるというのも自然である。だが、日本語において、こうした発話はまず「恥じ入らせる」行為、「反省させる」行為であることが多いのではないか。「なんで遅刻したのだ」と問われじっと頭を垂れて黙っていた生徒が、周囲の状況を「通して」「おや、理由を言ってよさそうなのかなあ」と覚って最後の最後に「なぜなら…」という言葉が出るのではないか。とすると、日本語および日本人の生活に密着した言語行為としては、「なんで遅刻したのだ」という発話行為のうち、「恥入らせる」側面こそ「発話内行為」であり、理由を問うことはむしろ「発話媒介行為」なのではないか。こうも言えよう。

R・M・ヘアの次のような議論もなんとなく日本語でも妥当しそうな気を呼び起こすから危険である。彼はある人に何かするように「命じる（order）」行為と「説得する（persuade）」行為とはまったく違うと言う。「命じる」場合には、事実を命じるのであるが、「説得する」場合には——事実が何であるかは一応別に——何ごとかを信じさせる行為だと言う。だから、「命じられた」場合は、「私は何をしたらよいのか？」と自問するが「説得された」場合は、「彼は私を思いどおりにしようとしている、注意しなければならない」と問うのが自然であると言う。ヘアの議論はそれこそ説得力があるが、これは英語における“order”と“persuade”との意味（使用法）の差異に西洋哲学の伝統が重なった議論である。彼が、「命令する」場合は理性的行為者に対して下されるが、「説得する」場合はそうではないと主張していることから、このことは明らかである。つまり、事態はおそろしく微妙なのだが、ヘアの精緻な議論によってわれわれが日常的に漠然と了解していた「命令」と「説得」との差異を哲学的に明確にした

(それが「日常言語学派」のやり方である) と思ったとたん、英語＝普遍という罠に陥る。(「神の命令を聞く」という図式に遡及する) 道徳を「命令」と見なす西洋哲学の長い伝統にしろしらず引き寄せられて、敵の手中におちてしまうのだ。

詳細は語れないが、B・ラッセルが目指した「確定記述」も、英語の“the”をいかに扱うかという問いなのであった。それに同じようにつきあっているうちに、いつしかわが国の哲学者は「英語」と「日本語」の区別を、精緻な哲学言語とあいまいな日常言語との区別と間違いつてしまうのだ。

こうして、哲学において英語支配は現在最も高度の段階に達していると言うべきであろう。エイズウイルスが人間の体内で次第に「適応して」強くなってゆくように、英語支配はこの欧米中心主義批判時代に「適応して」ますます強くなっている。つまり、その正体が見えにくくなっているのだ。国際会議でも何でも、今や欧米の哲学者たちは大層腰が低い。日本語を学ぼうともしない欧米の哲学者たちが、ドイツ語や英語で議論できる日本の哲学者たちを「尊敬」する言葉はいつでも聞かれる。だれも今やあからさまには「ヨーロッパ中心主義」を掲げようとしなない。だれもかれもがそれを「反省」している振りをしている。そして、そうしながら政治力にすぎない英語が哲学の領域でも絶大な威力をふるいつつあるのだ。

4. ではいかにすべきか？

こうした状況において、日本の哲学者はいかにすべきか。いくらでも提案はできる。例えば、(1) 国際会議は日本語でなしその通訳をつける。国際雑誌への投稿は日本語でし相手が翻訳をする。(2) 日本における講演はすべて通訳をつける。質問は日本語でよいことにする。逆に、日本人が欧米で講演するときは、日本語でよい。相手が通訳をつける。そして、長期戦としては、(3) 英語ないし外国語教育を徹底的にする。小学校のときより、英語ないし外国語をもっと徹底的に教え込むのだ。それによって日本語が崩れること、日本文化が廃れることはない。標準語と大阪弁を自由自在にあやつっている現代の大阪人の逞しさから学ぶことができよう。また、ヨーロッパのいわゆる小国(北欧諸国でもベネルクス諸国)において英語ないし強大な欧米語(ドイツ語・フランス語)等々を徹底的に学びながら、自国の言語を消滅させていない。

だが、私はこうした提案がいかに虚しいかも知っている。それを「いかにして」実現するかという策のない提案はただのスローガンである。だが、最近私にはこうした大上段に構えた提案ではない一つの道がかすかに見えてきた。それこそ、土台は欧米の価値観に則っているのだが、欧米哲学者と「対話」し続けること、彼らも気づいている「おかしさ」を彼らに提起し続けることである。彼らのテーマをわかった振りをしないこと。神も超越論的主体も実践理性も「わからない」と誠実に言うこと。また、——比較するのではなく——日本語における反証をいつも提起すること。「日本語ではそうではありません」と言うこと。そして、彼らに彼らが普遍的な哲学をしているのではなく英語を分析しているにすぎないことをつねに思い知らせることである。

そして、こうしたネガティブな行為を積み重ねて、一つのポジティブな方向を期待すること。うまくいくかもしれない。うまくいかないかもしれない。結果はまったくわからない。だが、こうした営みをどこまでも貫くことそのことが「哲学する」ことだと私は理解している。

最後に私の実践記録をいくつか紹介しておこう。「日米現象学会」というものが東京大学駒場で開かれた。その場合、50名ほどの参加者のうち日本人は8割ほど。だが、英語しか「公用語」として認めないという。私はおかしいと思い、会議のはじめに言った。

「この日本で8割が日本人である会議になぜ英語しか許さないのですか？ ドイツ語のほうが得意な人もいます。日本語でしか意見を言えない人もいましょう。その場合はだれかが英語に訳せばいいのですし、堅苦しく英語だけとしなくてももっと豊かなコミュニケーションはできると思うのですが……」

この場合、嬉しかったことに、アメリカ人の議長が「それはとてもいい考えだ」とまず賛同し、会場からも賛成の声があがり、会議は私の提案通りとなった。そして、その後で私はおもしろい反応を観察した。パーティの席で私は多くのアメリカ人から「あなたの発言は素晴らしかった」と言われたが、少なからぬ日本人からは「あんな発言をして困るなあ」と言われたのである。

国際カント協会の会長G・フンケが来日し、日本カント協会で講演したことがあった。懇親会の席で私は彼に直接言った。

「今、論文や発表の公用語は英・独・仏しか認められていないが、これはおかしいのではないですか？ われわれ日本人にとって、日本語を使用していけないというのはたいへんなハンディですよ」

するとフンケ曰く。

「それはわかるけれど、では日本語を許すと、次に中国語はどうだ、スペイン語はどうだとなって終始がつかなくなる。どうすればいいのか、頭の痛いことです」

しかし、じつは彼はあまり悩んでいないのである。一般に現に利益を受けている者がその既得権を捨てることを期待はできない。不利益を被っている者から発言してゆくほかはないのである。

ドイツの現象学者が日本（これも駒場）で講演したことがあった「歴史哲学」についてのものであった。質問時間に私は言った。

「あなたは『歴史、歴史』とおっしゃるが、日本に来る前に少しでも日本の歴史を勉強してきましたか？あるいは、あなたのご発表において、日本における歴史という問題を少なくとも考えてきましたか？」

何も考えてこなかったのである。彼はただ「歴史の形式だけ」を考えていると答えた。それが何であるかいまだにわからない。

私がウィーンで自主ゼミをしたことがある。そのとき、私は学生たちにはっきり言った。

「私がここウィーンでドイツ語で講義することは不平等です。なぜなら、ウィーン大学の教授が来ても日本語ではなくドイツ語で講義するから。こうした不平等を好みませんから、私は英語で話します」

学生たちは、この「過激な」提案に違和感なくみなフンフンと頷いてくれた。

そのほか、私はウィーンで進行中の「ヨーロッパ中心主義」でも「比較思想」でもない「オ3の道」をめざす「相互文化哲学 (Intercultural Philosophy)」に興味を寄せている。その前途は明るくない。しかし、私はこうした運動を主宰しているF・ヴィマー教授に何でも話せるのだ。「また、そんなこと言って。ヨーロッパ人は傲慢だから困るなあ」とか「ニーチェ以降なんてなんの意味もないですよ」とか言えるのだ。彼らも「ヨーロッパ中心主義」ではない普遍を求めようと格闘している。最近では、日本人だから「禅」でしょうというようなあさはかな哲学者もいなくなった。

こうして、——おかしなことなのだが——「私の苦悩」を比較的わかってくれるのが、わが国の研究者仲間ではなくて、欧米の研究者たちなのだ。わが国の哲学者たちが発信しないゆえに、我慢しすぎているゆえに、彼らには届かないところもあるのだ。たしかに、安直な解決策はない。しかし、われわれがあきらめてしまったら、事態は何も動かない。われわれが問題を提起しなければならない。それを、欧米の哲学者も期待しているのである。